

第3回館長講座

司会：第3回目の館長講座ということで、今日は「博物館はいつから」ということで、当館館長の鷹野が講演致します。それでは館長、よろしくお願いします。

館長：みなさんこんにちは。毎回、博物館の話をさせて頂いておりますが、今回は博物館はいつ頃からどういうものができて来たのかということを中心に、お話しさせていただきます。

博物館といいますと、みなさんそれぞれ「こういうものだ」と思い付くものを、お持ちになると思うのですけれども、基本的な機能というのは、ここに書きましたように資料、いろいろなものを集めて保存していく。資料のこととか博物館の活動とかについても研究をするというところ、それからこれが大きい機能ですけれども、収集してきた資料などを整理しながら展示して、展示ということを通じていろいろ活動していくこと。

それらの活動の中で一番大きい意味を持つのが教育ですが、これらの機能がそろってくるのが、19世紀ぐらいになってからですので、その機能が全部備わったところを最初から、というのはなかなか難しいところがありますので、今日はその中でも基本的な機能として資料を収集してそれが保管されて、何らかの形で公開する、人に見せる場がある、そういうところの始まりから話していこうと思います。

1979年に雄山閣から出されました『博物館学講座』という全10巻の講座があります。この中で、「アジアの博物館史」というところを担当されました、佐々木進さんという方が、西アジアの一角の、現在のイラクの北部地域、アッシリアとっておりますけれども、そこで戦利品などを集めて、そして町の門の近くに陳列していて、これを「博物館史の原初的な姿」とされました。戦いに勝った、ということの意味する為の戦利品を陳列していたのですが、もちろんそれがずっと見せられていたという訳ではなくて、あくまでも一時的な陳列だったろうと思われるのですけれども、とにかく、資料が集められてきて、それを人に見せるということで、これが博物館の一番初めの姿かとされます。

ヨーロッパのギリシャの世界では、最近なにかと世界を騒がせているギリシャは、観光を第一の産業としていますけれども、現在でも観光資源となっている神殿が建っている神域は、一種、博物館的な雰囲気があった、とされています。神殿をめぐる神域には神殿に奉納される奉納品を納める宝物庫が建てられていて、これがただ納められただけではなくて、特別にそれを見ることを許される人達もいた。そういう人達には公開をするという形がとられていたといえます。

デルポイの神殿の神域には紀元前1世紀の頃ですが、貴重な資料が奉納されて置かれている、それを見る事が出来るという意味で博物館というものになっていたようです。こ

の、宗教的・政治的な動機だけではなくて、コレクション、奉納されたものに、芸術的な品質に関する評価がなんてこともされていたようでした。

奉納品の中には、作者の名前とともに、作品そのものの巧みさというか優秀さというか、それによって、称賛を受けることがあって、あたかも美術品の陳列品のような評価というのが受けられていたということがいえるようです。

ギリシャの神殿というと私たちに一番なじみがあるのは、アクロポリスの丘のパルテノン神殿ですけれども、パルテノン神殿をめぐるアクロポリスの丘の平面図の中で、これがパルテノン神殿ですね。このアクロポリスの全体の入口が左側のほうですけれども、その近くにこの赤く塗ったところに絵を飾っていた部屋があった。絵といっても板などに描いたものを飾ってあった。この絵を飾った部屋をピナコテーカと呼んでいたんですね。実際、この絵画で飾られた部屋の中は臥所、横たわる床があって、アクロポリスを訪れる巡礼の人達などの休息用の場所であったり、あるいは、食事をしたりする、そんな場だったらしいと最近では解釈されているようです。この絵画が飾られていた、というところからしますと、美術館と同様の空間と見られます。実際、その後、現在に至るまでこのピナコテーカ、これ、ギリシャ語でピナコテーカ、ラテン語になってピナコテーカ。これが絵画館、美術館の名前にも残されています。英語にするとピクチャーギャラリーというふうに訳されていて、まさに美術館ですね。

実際にミュンヘンにあるアルト・ピナコテーカは有名な美術館ですし、それからバチカン美術館の中に絵画を展示してあるところをピナコテーカと呼んでいます。右下の写真は、バチカンのピナコテーカのガイドブックの表紙なのですが、ここにある有名な、というか割合、好きな絵を並べてみました。ここには特にキリスト教の絵画が多いのですが、有名な作品としてラファエロの作品を3つ。

左側が「フォーリーニョの天使」という作品、真ん中は非常に有名ですが、「キリストの変容」、キリストが天に昇っていく様子。それから、右側は「聖母戴冠」という絵です。これがピナコテーカに入ってすぐのところのところに置かれている。

次の絵は、左側はレオナルド・ダヴィンチの「聖ヒエロニクス」。右側、カラヴァッジョの「キリストの埋葬」。こんな絵が、よく知られたものとしてあります。

それからがミュンヘンのアルテ・ピナコテーカです。「アルテ」には古いという意味があるのですけれども、別にこの建物が古いとかそういうことではなくて、扱う時代が古いほうのピナコテーカ、14世紀から18世紀くらいのヨーロッパ絵画で、これに対して新しいほうがノイエ・ピナコテーカで、同様に新しいといっても、18世紀、19世紀くらいのヨーロッパ絵画などを展示してあるのですが、そういう区分をしたピナコテーカです。

アルテ・ピナコテークのラファエロの絵です。左側は赤ん坊を抱いた「テンピ家の聖母」赤ん坊じゃなくて、キリストですね。真ん中が「カニジャーニ家の聖家族」で、右は「垂れ幕の聖母」です。ラファエロの描くお母さんの姿というのは、とても優しい顔した慈愛に満ちた絵ですね。

それから、こんなの見るとホッとするんですが、ブリューゲルの「怠け者の天国」、左側の白い衣着た人なんか、いかにも怠け者でよく食べたんだろうなあ、もっと働けよ、と言いたくなるような絵です。

それから、これはあの、プーシェの「ポンパドール侯爵夫人の肖像」、緑色が非常に印象的な美しいフランスの宮廷の人ですね。こんな絵があります。

今日はだいたい話が横道にそれていますが、お許してください。

また元に戻ります。ギリシャの次の時代はローマが地中海世界を征服した時代。ローマは、共和制の時代からローマ帝国に移りますが、この時代には個人博物館とか家庭博物館とか言われるような場が、随分見られました。これは将軍たちとか富豪たちが自分たちの家の中を、戦利品や絵画や彫刻などで飾るといふこと、そういう風潮が非常に流行しまして、それを称して、個人博物館とか家庭博物館というふうになっております。

これは絵画や彫刻だけではなくて、宝石とか、武器のほかに自然物。自然物の中には、ライオンとか虎とかいった動物なんかもあったり、オウムや孔雀、これらはきれいな鳥ということでしょうね、が飼われていたり。

それから、部屋だけではなくて、ローマ時代の家は、大体、中に入るとすぐ中庭があって、そういったところにも、彫刻なんか置かれていたりしましたし、また、植物の鉢植えなんていうのもあって、動物園とか植物園のような観を呈していたこともわかります。これは現在まで残されたイタリアの遺跡のポンペイなどにも、見られるところですね。

それからライオンなんかは、ローマ時代のライオンというと闘技場ですね、剣闘士と戦うというそんな場面を想像しがちけれども、それだけではなかったようですね。動物を捕獲して来た、そんな実際の姿が、モザイクの絵に描かれていまして、これはシチリア島にあります、ピアッツァ・アルメリーナという、ちょうどシチリア島のほとんど真ん中くらいにある小さな町ですが、その町の郊外にヴィラ・ロマーナ・デル・カザーレという名前の遺跡があります。ヴィラ・ロマーナですから、ローマ時代の別荘で、カザーレは皇帝なので、皇帝の別荘という名をつけられています、それくらい豪壮だという意味なのです。しかし、皇帝に関係するというよりも、壁画に、壁画じゃない、床のモザイク画にいろいろ描かれているような動物を捕獲している場面がたくさんありますので、動物商とし

て財を成した富豪の別荘のようであります。これ、モザイクです。ご承知のようにモザイクって小さなかけらを埋め込んでいるわけですね。しかしまあ、右下がぼけちゃって恐縮ですけども、本当にもう絵と見間違えるような非常に細かい作りで、もちろん、世界遺産の町であります。今回は紹介致しませんが、モザイク画の中にはビキニスタイル、つまり胸と腰を覆う女性が、ダンベルを持って運動している様子なんかもありまして、そんな絵も描かれていたり、一番奥の寝室だっていわれる部屋にはですね、とっても可愛い女性と男性が抱擁している、なんかとっても愛らしい絵が描いてある、そんなモザイク画が見られます。これ、もっと水に濡れていると色が鮮やかできれいなのですけれども、こういったところから、当時の生活が見えますね。

それから次に、みなさんご存じのポンペイですね。この当時の人達が家をさまざまに飾るという様子が今でも残されている訳です。

これ、かなり大きい家ですけど、この手を挙げたブロンズ像がありますが、これはレブリカで、実物はナポリの国立博物館に置かれています。そしてこの奥には、アレキサンダーモザイクと呼ばれるアレキサンダー大王がペルシャとの戦い、イッソスの戦い、その戦いの様子を描いた非常に有名なモザイクがもともとここにあって、これも現在はナポリの博物館に置かれています、こういったもので、家をかざっています。

それから、部屋の中、こういう壁画ですね、非常に狭い空間の中で壁がこうやって壁画なんかで覆われていますが、これを見ると、やっぱり、我々の感覚とは全然違うなあ、これで落ち着いて生活できるかしらという気持ちになります、とにかく非常に見事な絵が残されています。

ポンペイが埋没したのが 79 年ですから、2000 年近く前の絵がそのまま見られる。ポンペイの町の中心から少し離れたところに有名な家が残っています。残っていますとってのも上のほうは、修復されている訳ですけども、「Villa dei Misteri ひぎそう 秘儀荘」の建物の中にこういう非常に有名な絵が残されています。

花嫁の化粧とディオニソス、ディオニソスというのはバックスなので、お祝いの神とかいうような人でしょうか。ディオニソスにささげる儀式の場面というのが、非常に印象的な赤を使って壁一面に描かれています。本当に壁一面、「ポンペイの赤」というのだそうで、未だにこの赤は確実に再現できない。この写真は 1985 年に撮った写真で、この時は中まで入って、絵の手前にだけ柵があって、絵の近くまで行けているんですけど、その後、絵の保存などの問題もあって、部屋の中までは入れないようになっていたこともありました。

それから、ポンペイはナポリの近くの火山のベスビオ山の南東側に位置する訳ですが、

ここに書いたソンマヴェスヴィアーナという町は、ポンペイと逆というか、ベスビオ山の北側にある町です。この町の中のローマ時代の建物の調査が、2002年頃から現在の文化庁長官の青柳正規あおやぎまさのりさんの指揮のもとに進められていまして、この建物は住居空間という訳ではないようなのですが、彫刻なんかがこんなふうに置かれていたということを想定させます。これ見てわかりますように、この壁のここから上の、これは発掘した後、作っちゃっていますね。修復して作っていますが、壁に壁龕といいますが、くぼみが残っている。ここに立っているのは女性像なのですが、これはこの位置からちょっと手前に倒れた位置で、おそらくこの壁龕に女性像が立っていたんだろうと思われる、こういう空間があったんでしょうね。それから、その反対側の壁の壁龕の空間にディオニソス像が立っているのですが、これはここに立っていたのかどうか、わからないんです。また、さっきの女性像のほうは、これはほとんど完形で出て来まして、これでいいのですが、こちらのディオニソス像のほうは、かなりバラバラになって出まして、この遺跡自体が1930年代に一回調査されているんですけども、その時に出土していた資料とつなぎ合わせることで、大体こういう一体となっています。

さっきの女性像もプラスチックで作られている全くのレプリカですが、この遺跡を毎年の調査が終わる10月くらいに市民に公開する、その公開の時に説明する為に製作されて立てられています。ここにあった、これはここにあったという確証はないのですが、いずれにしても部屋の中を飾るということが、富豪とか商人たち、要するにお金持ちの人の間では、なされていたことをうかがわせるものになります。

こういう風潮、個人博物館というか、個人が博物館を作ってそれを私蔵して自分のものだけにしてしまう。そういう風潮に対して、当時、著名人であるPompeiusポンペイウスとか、あるいは、CaesarカエサルとかPollioポリオとかこういう人達は自分たちだけで持っているのではなくて、本来こういった彫刻とかいったものは、一般の人達みんなのものなのだから、一般に公開しようと主張したり、実践したりしていました。Caesarカエサルは宝物や彫刻を神殿に奉納して人々の鑑賞にも供する、ということをしていましたし、Pollioポリオは自分で今風にいえば私設博物館・私設美術館、そういったものを作って公開していましたし、それから、Marcus・Agrippaマルクス・アグリッパ、この人は、初代の皇帝のアウグストゥスの最も信頼する将軍と呼ばれている、非常に人格高潔な人です。ローマとエジプトが戦う、アントニウスとクレオパトラの連合軍とアウグストゥスの軍との間の紀元前31年のアクチウムの戦いがありまして、その時にローマ軍を指揮したのはAgrippaアグリッパ将軍。政治家としても非常に優れた人であったようです。このAgrippaが自分のコレクションを死蔵するのではなくて、社会や公衆の為に提供しようと主張する訳ですが、こういう声が残っているということはほとんど効果がなかった、ということの反映かも知れませんね。大勢にはほとんど影響なくほとんど自分の家の中に貯めこむことがされていたようです。

ですが、ローマ帝国がだんだん衰えて来ますと、だんだんこういう傾向も下火になって

来まして私蔵されていた美術品も四散してしまいました。

ローマの町の中心にありますフォロ・ロマーノという公共広場です。

一番向こうにコロッセオが見えます。コロッセオの手前のところに凱旋門がありますが、これはポンペイが噴火で埋もれたのが 79 年と言いましたけれども、この凱旋門はティトス皇帝の時に作られた凱旋門で、ポンペイのあと 3 年後、82 年に作られた凱旋門です。

この写真、個人的に私とても好きでありまして、しばらく、私のパソコンのデスクトップに使ってまして、これは 1985 年の写真かな、とても暑かったことを覚えています。

この凱旋門を作るということが、皇帝の為に、と言うか権力の誇示というのがあると、こんな装飾を見ても、理解できる場所があります。

古代はおしまいにして、中世。中世は教会にいろいろなものが蓄積されていくことがあります。ヨーロッパの中世というところは、キリスト教が支配する世界だといっしょいでしょう。これは生活の上からも信仰の上からも、全部キリスト教が支配する、という時代だった訳です。その中で、教会にもものが奉納されるとか、教会自身も信者を集める為にいろいろなものを集めて見せる、ということもしていました。これはあとで出て来ます日本の古代中世の、神社仏閣なども同じようなことをしています。

教会を離れて別のところ、この、ヴンダーカマー **Wunder Kammer** と呼ばれる博物館の先駆的なものがありました。珍しいものを集めて、展示するという風潮の表れ、これがドイツで流行したヴンダーカマーと呼ぶ部屋で、ヴンダーカマーってそのまま訳すと、「驚きの部屋」とか、「驚異の部屋」とか、簡単にいうと、「ビックリルーム」、そういったほうがわかりやすいような気がするのですが。

これは 15 世紀のイタリアで発生して、16 世紀の後半にドイツ語圏に非常に広まりました。18 世紀後半まで盛んにあつて、現代まで続いているものもあります。珍品を収集したコレクションルームのような説明がされていますが、どんなものがあつたのかというと、ワニの剥製、天球儀、それから、椰子の実、時計、珊瑚細工、楽器、甲冑、ロザリオ、ガラス細工、絵画、貝殻…自然物とか人工物とか、余り区別もなくとにかく珍しいもの、変わったものや、変なものを集める、そんな空間だったようです。

集英社新書で、小宮正安『愉悦の蒐集 ヴンダーカマーの謎』という本が出ています。その中に紹介されているヴンダーカマーの部屋の中の様子です。ワニが天井にへばりついている、天井に魚なんか、どういうふうにしてやったのか、ワニの剥製と書いてあります

が剥製なんでしょうね。肉を抜いて皮だけこういう風にして。ケースの中に入れられるのではなくて、壁や天井を覆って置かれ、並べられるということがあったようです。

この傾向は、今でも見られます。東京にもヴンダーカマーみたいなところがありまして、東京駅の丸の内南口を出ますと、すぐ左手のところに、「東京中央郵便局」の建物があります。あの建物を壊す壊さないをめぐっては当時の都知事の石原さんがなんだかんだいった、ってことありましたけれども、これだけは石原さんいいことしたな、と思いました。そのおかげで、中央郵便局は全部壊されることなく、建物の外観を残して中に高層ビルを作っています。

「キッテ」、カタカナの「キッテ」で、中央郵便局だから「キッテ」なのかも知れませんが、この建物の愛称は「キッテ」というのですが、この2階と3階に「東京大学総合研究博物館」の出店が作られていまして、これが非常にヴンダーカマーを意識した展示となっています。

ひとつ前のスライドで示したような、ワニが天井を這っていますけれども、「キッテ」の中の東大博物館にもワニが天井ではないのですが、上のほうに並べられていました。館内の写真が撮れなかったので、お見せできないのですが、そんなのがありました。それからまたちょっと「大英博物館」にも、ヴンダーカマーのような展示がありました。

この展示ケースはもともと図書館の書棚のようですね。壁沿いに置かれる、本棚のような棚なのです。「大英博物館」は、もともと博物館だけじゃなくて、図書館も非常に大きなものでした。現在、「大英図書館」は他のところに移りまして、全部「大英博物館」になっていますけれども、図書を収蔵していたケースがそのまま使われているのでしょうか、こうやってその中に展示物が置かれています。

左側の写真のようにエジプトのミイラの棺が置かれていたり、いろいろなものがありますけれども、ちょっと変わっていたのが、日本製の「人魚」のミイラが展示されていて、分かりにくいかも知れませんが、この幅がそれほど広くない。これくらいですから小さなものですが、日本で作られたものなのです。日本から輸入された「人魚」なのです。

これの作り方は、最近「国立歴史民俗博物館」で贗物展がありまして、正式な名称は忘れましたが、贗物ばかり集め博物館で贗物を展示する、非常に面白かった展示なのですが、その中でこのミイラの作り方が復元されていました。小型のサルの上半身で、それから、魚の下半身をつなげたということが解明されていましたが、これもこんなミイラを展示する、まさにヴンダーカマー、驚かせる部屋をちょうど展示したようなものかなというふうに思います。なかなか、見ていて飽きないような空間でした。

日本にいいよ話を持って来ます。日本でも博物館全体を考えると、冒頭に述べたよう

な機能を果たすということなのでしょうけれども、それに至る過程を少し見ながら話を進めさせてください。

古代は大寺院、東大寺のような大寺院に、貴族や豪族たちがいろいろなものを奉納していきます。儀式用具とか、仏具とか経典とか日常の生活用具とか、そういったものを奉納していきます。

その奉納されたものを納める為の宝蔵が作られていきます。東大寺に今も残る正倉院、これが代表的なものです。もともと正倉というのは東大寺の専売特許ではなくて、古代の寺院には正倉があったのですけれども、現在では、正倉というと、東大寺のものをさすようになっていますね。もともとは、校倉造のこれとこれだったのですが、あとで真ん中の部分をつなげて、現在のこういう形になっていきます。

正倉院に収められたものは、天平勝宝 8 年に聖武天皇の供養として、奥さんの光明皇后が東大寺大仏に聖武天皇の日用品や儀式用具などを大仏に奉納した。奉納された、ということ、これらを収納したものです。

ただ、これが博物館の始まりか、といわれると、ちょっとこれは違う所がある。資料が収納されて、保存されてきたところなのですが、これが公開されたか、というと、全くなかった訳じゃないんですけれども、ほとんど公開されて来なかったようで、そのおかげで、現在まで資料が良く残っていた。ただ、年に一回、勅許ちよつきよを得て、天皇の許しを得て、この蔵を開けるということがありました。その時、限られた人の眼には触れていた。蔵を開けるのは、これは中の資料の虫干しとか風入れとか曝涼ぼくりょうとか、要するに資料の保存の為の時間を取る為に開ける。そういう時に人の目に触れた、そういう年一回の曝涼ぼくりょうの伝統が現在も残っていて、毎年秋になると、奈良の国立博物館で「正倉院展」をやりますよね、この曝涼ぼくりょうの時の公開の風習がそのまま受け継がれているわけです。

神社に収められたもので代表的なものとして、愛媛県おひめしまの大三島にある、「大山祇神社」と紹介します。ここは武士達の信仰を集めた神社で、この大山祇神社おおやまづみの宝蔵には、全国の甲冑をはじめとする武器・武具の国宝・重要文化財のうちの 8 割がここに収納されているというくらい武器・武具が収蔵されている。

中にあるものでは、義経の奉納したものとか、頼朝の奉納したものとか、後村上天皇、南北朝の、ですね、が奉納したものとか、護良親王もりなが、これは、私は護良親王もりながでなじんできたんですけれども、護良もりよしという読み方が正しいというようです。その護良親王もりながの奉納したものとか、南北朝時代の楠正成を討ったという武将の奉納したものなど、このようなものが国宝となって収蔵されております。

大山祇神社おおやまづみの国宝だけで、これだけある。しかし、神社仏閣などの宝物館・宝物殿というかこういうところに収蔵されたものというのは、さっきの正倉院もそうでしたし、特別な儀式の時を除いて、公開されるということは、ほとんどなかったといえるようです。

中世になりますと、中世の特徴というのは、仏教の大衆化ということがいえるでしょう。寺院が開帳というようなことを行うのですね、これは開帳ということで秘仏を公開したりとか、あるいは信徒たちが寄進したようなものをその期間中に見せる。見せて、人を集めて、お札を売って、お金を集める、と、それが大きな目的でもありますけれども、そういった場がありました。資金集めの為にとということで、戦国時代以降、大規模に開帳ということが行われています。

もともとはお寺のその場所で秘仏を公開するというので、人を集めていたのですけども、近世になりますと、今度はお寺に来てもらうより、お寺が出て行く、出張するという、人の集まる場所、お寺が宝物なんかを持って行って、そこで人に見せて、また、お札を売ってお金を集めるというようなことも盛んになりました。

江戸でいえば、両国の「^{えこういん}回向院」の境内、それから大坂の「^{せんにちでら}千日寺」の境内など、盛り場を会場として、出開帳、デガイチョウ、と濁るんですが、出開帳が盛んになっていきます。出開帳の場にお寺が秘仏を持って行って見せる訳ですね。そして人を集める目的の為に、いろんなものを置こうということから、職人たちの細工物なんかは並べられたりしていましたし、後世の言葉を使えば博覧会といったようなものと同じような賑わいがみられたというようです。

ここに書きませんでしたけれども、中世・近世というと、家の中に、最近の新しい家の中ではほとんど使われることなくなってきたようですが、床の間という空間がありますね、あの床の間、そこに掛け軸が飾ってあったり、それからまた、茶道具が置かれたり、あるいはお花が活けられたり、そういうところをみると、床の間は一種の展示空間だというふうにも言えますし、あるいは家の中のちょっとしたギャラリーというのが、床の間という非常に小さな空間ではあったけれども、見られる訳です。

一方、神社のほうでは、絵馬堂が、盛んになっています。本来、絵馬というのは、願い事をかなえてもらったことに対しての御礼の意味で奉納するという性格のものですけれども、現代の絵馬というと、むしろ願い事をする為に描きますね。初詣の時なんか。

3月まで大学で授業をしていたので、聴いていたのは学生ですので、「君たちも3年くらい前、やっただろう？」って聞くと、うん、って頷いてくれるんですけども、今日はそのはいきませんね。やはり家族の幸せを願うとか、そういう意味で絵馬を奉納するというので、なさったかたもいるんじゃないかな、とは思います。

本来は、願い事をかなえてもらったことの御礼という意味であったのですが、実際は「こういうことをお願いします」ということを書いた絵馬なんかも、たくさん見られますね。江戸時代になりますと、神社だけではなくて、お寺にも広がっていきまして、この絵馬堂というのが、絵馬を飾るギャラリー的な性格を持っていきますし、それだけじゃなくて、いろんな記録が書かれたりとか、意見を発表するという場にもなります。

算額というのがあります。算額、算数の算に額はこの額ですね。この近くでは先日、「鹽

竈神社」の博物館に行ったのですが、あそこに算額がたくさんありますので、ご覧になったらいかがと思うのですが、要するに数学の問題を額に書いてですね、「これ、解いてみろ」と、掲げるのですね。そうするとそれを見た算術の達人がですね、「こうやって解くんだ」と、答えをバツと並べるといふような形で、こう、問題を解き出すことがあったりと。

変わったものだと、話は横にそれてしまいますが、よっぽど算額に愛着があったのか、自分のお墓の墓石にね、算額の問題を書いている人がいまして、そこに葬られているという人がいました。その人のお墓を、お墓じゃない、墓石を展示するのを手伝ったことありますが、そこまでこだわるかなあ、って思いますが。下の写真は茨城県の「笠間神社」の絵馬堂で、いろんな絵馬がありまして、自動販売機みたいに邪魔なものがいろいろあって、写真撮りにくいんですけども、中はこんなふうに所狭しと絵馬が掲げられていました。

盛り場、先程もあげた両国の「回向院」とか、江戸の両国橋のたもとひろこうじの広小路だとかですね、こういったところには「見世物小屋」などありました。珍品とか珍獣とか、怪しげなものもたくさんあったのかも知れませんが、とにかく珍しいものを見せる場というのが作られたりしました。

ですが、江戸の場合には、こういった興行をする場というのは恒久的な建築物では出来ないんですね。よしず張りとか、小屋掛けとか、柱を立ててそれに、よしずを張ったりね、一時的な仮設のものだということで許可が下りるといふことでしたので、あくまでも一時的な見世物小屋だったようです。だから、常設的な展示室ではなかった。

一方、常設的なものはなかったかといふと、盛り場にもありました、「茶屋」という場。茶屋を説明するのに、しばらく前までの学生たちに話す時には、今の喫茶店みたいなものだ、と言うと大体、うん、ってわかっている人が多かったのに、この頃は喫茶店といってもわかってもらえないところがありまして、カフェって言えばいいんですかね、なんでもカタカナになっちゃって面白くないんですけれども、今風に言うとカフェって、そういったところに、これも人集めをする、人寄せの為に店の中に孔雀を飼ってみたりとか、それから鹿、鹿はなんですかねえ、バンビとか、子鹿の可愛らしさとか、そういうものをみせたいということなのではないでしょうか。それから「鸚鵡茶屋」というのもありました。オウムを飼って見せる。先程、ローマ時代にも孔雀の小屋が出てきたのですけれども、同じで、やっぱりきれいな、あるいは珍しい鳥というようなもので人を集めようとしたといふことなんじゃないかな。そういった「孔雀茶屋」とか「鹿茶屋」とか「鸚鵡茶屋」とかそういう茶屋の形式、これはかなりこじつけたところがありますけれども、動物園的なものの始まりといふふうにいえるのではないかといふふうにいわれます。動物園については、またあとでふれます。

そうした中で、江戸時代の後半ですけれども、町人層って言うか商人層というかが非常に豊かになってくる中で、現代でいうコレクターが現れてきます。

二人紹介します。ひとは「石の長者」と呼ばれた^{きうちせきてい}木内石亭という人です。もともと庄屋さんの出なのですが、さっさと隠居しまして、弟がいたのでそっちに家督を譲りまして、自分は好きな石集めに一生をかけた人です。12歳の時に変わった石を見つけて目覚めちゃったということが書いてあるんです。奇石というのは、奇妙な石というだけではなくて、いろんな珍しい形をした石ということですね。残念ながら、この^{きうちせきてい}木内石亭のコレクションは、ものとしては残っていないんですが、彼が集めたものは『^{うんこんし}雲根志』という書物の中に残っています。自分で集めるだけではなくて、同好の士を募って、「^{ろうせきかい}弄石会」石を^{もてあそ}弄ぶという、そういう会を組織していましたし、お互い同士、やり取りをして、手紙のやり取りをしたりとか、あるいはモノの交換をするというようなことをしていたようです。自分で集めるというのが基本だったようですけれども、目を付けたものがあると、どうしても欲しい、とお願いしまくって手に入れるとか、もらえない場合には、お金で買うというようなこともしていたようです。自分が持っているものと交換できるものがあつたら、それと交換して珍しいものを手に入れるということをしていました。これが、今まで残っていることの意味というのは、この奇石の中に考古学的な、現代でいう考古学の分野の石器、これが非常にたくさんありまして、もちろん縄紋時代の石器・^{せきふ}石斧とか矢じりとかそんなものたくさんあるんですけれども、古墳時代の副葬品であった腕輪の石、車輪石といって貝殻を模した装身具やいろんな形の変った、現代でいうと古墳時代の遺物としての石製品というのがたくさん残されていました。石亭の見識というのがわかります。

それからもうひとり、大坂の町人学者^{きむらけんかどう}木村兼葎堂という人。兼葎堂と石亭とはほとんど同じ時期にいた人ですけれども、この、木村兼葎堂という人は、酒屋さんの出で、これも自分の商売をうっちゃって、とにかく趣味に走っていた人のようです。非常に多才な人として、物産学、現代的にいうと、博物学ということになるでしょうか、それと共に絵を描く、それから詩を作る、というとにかく多才な人でした。自分の趣味を持つだけでなく、そういったものを人と共に分かち合う、というか楽しみ合う、というようなこともしていたようです。

この絵は渡邊崋山の描いた兼葎堂の絵ですが、こんな人のようです。兼葎堂雑録」というのが残ってまして、その中に彼の集めたコレクションが記されています。私邸の中に、「兼葎堂」という場を作りまして、そこにモノを並べるということもしていましたから、そここのところを見ると、一種の私設博物館の様相を遂げていましたし、何よりも兼葎堂というと、むしろ、サロンとして有名だった。いろんな人が出入りして、そこでいろいろ話をしたりとかする場として、そこが使われていた、という記録が残されています。

残念ながら、この兼葎堂のコレクションも現代まではほとんど残っていません。現在は大阪の「自然史博物館」に「木村兼葎堂貝石標本」、貝の標本が残されている程度です。しかし、こういうふうには、モノを集める、集めたモノを書物にして残す、残しておくは当然、それは何であるかということも研究しなければならない。集めたものを研究するというこ

とも、盛んに行われていた。これは、町人だった、富裕な町人層だったということもあったでしょうけれども、それと共に江戸時代の後半になって入ってきた蘭学とか、それから古くからある本草学とかいったものが、一般の富裕な町人層の中にも、浸透してきたことがあるといえます。

その一つの表れが「薬品会」、ヤクヒンカイじゃない、「薬品会」と読みますがこれは平賀源内などの蘭学者たちが中心になって開いたものですが、源内さんというと、昨日は土用丑の日で、「土用の丑の日は、うなぎを食べよう」とコピーを作ったのは平賀源内で、我々はそれに乗せられて「土用になるとうなぎを食べなきゃならない」、とね。どれくらいこの時期にうなぎを食べることに効果があるのかというのは、医学的に果たして証明されているのかどうかですね。確実に平賀源内に乗せられているのですよ、我々は。源内が、うなぎ屋さんから頼まれて、こういうコピー作ったらどうだろうというので始めたのが、土用丑の日とうなぎですが、平賀源内などが「薬品会」と名付けた物産会を開きました。これはものを、いろいろなものを集めて来てものの標本の名を正そう、とみんなで共通認識を作ろうという場だったようです。集めたものの中には、もちろん自然の資料もあるし、さっき言ったように、石なんかの資料もあつたりと、一種、博覧会的なもので、資料を集めて、一堂に会して見せる。そしてそれらのものに関しての共通認識を持とうということ、そういう雰囲気があった。特に蘭学の浸透、オランダの学問が入ってきたということと、それから古くから日本には本草学、前回の特別展の「医は仁術」展の中にも、本草学は出てきていましたけれども、本草学の伝統があります。もともと、本草学というのは、薬草に関する研究というか、学問だった訳ですけども、その、薬草、草というものそのものを扱うということからですね、博物学というところに発展していく訳です。その草を通じて、あるいは植物を通じて、モノを扱う、それからそういった蘭学という西洋の学問で具体的なモノを見るという様なことがあって、それから、コレクターがいたりするというようなことから、ものそのものへの興味・関心ということが非常に強くなって来ました。そういう物産学というか博物学の雰囲気の中から、明治の始めの博物館の創設に力を尽くすような人達が生まれて来ることになります。

江戸時代が終わって、黎明期になります。博物館のごく初期のことなのですが、明治元年というのは、1868年で、あと3年たつと明治維新150年という訳ですね。明治維新の100年の時は、明治100年の国家的な事業が行われました。

博物館の世界でも無縁ではありませんで、先程、贗物展のところで紹介しました、千葉県きくらの佐倉市にあります「国立歴史民俗博物館」は、まさに明治100年記念事業としてできた博物館ですし、それから北海道でも、北海道開道100年、道を開いて100年ですね、そういうことで博物館がたくさん作られましたし、もう一つ、鹿児島もそうですね。ちょっとまた、脱線しますが、3年後の明治維新150年を目指して、とりあえず、薩長土肥あたり

で記念の展覧会なんかやろう、という計画が盛り上がっているんだそうです。この前、土佐の方から、そんな話を聞きましたので、「勝ったほうだけでやるんですか？」って言ったら、「いや、そうはしたくない」、とっておりました。

明治維新という時期は、非常に社会が大きく変動したわけですね。2番目の廃仏毀釈のことを先にふれますが、とにかく古いものは全部だめだ、新しい世の中だから古いものは全部だめだ、というようなことから、廃仏毀釈、仏教を廃止するという風潮が非常にみなぎります。仏教がだめで、その代り、神道、これは天皇中心とするといってますから、神道の世界で行く国をつくって行こうということからも、仏教寺院が経済的にも非常に衰えてきたことがありました。

一番すごいことやったのは、鹿児島県ですね。鹿児島県というか薩摩藩というのかな。まさに廃仏毀釈を実行するというので、薩摩藩の中のお寺を全部潰した。ここまでやるか、と思うくらい。というのは、代々の藩主、薩摩藩の島津さんの藩主の菩提寺までやめてしまった、というくらい徹底したものだのですが、そういう古いもの全部だめという非常時で、今でいう文化財全般に対する危機が訪れます。

代表的なものを挙げると、ここにある法隆寺なのですが、非常に経済力が衰えて行きまして、保有していた宝物の一部を皇室に献上します。献上するって言葉はいいんですけども、簡単に言えば、宝物を売って、皇室からお金をもらったということになるのです。その時の宝物が現在の「東京国立博物館」の「法隆寺宝物館」にある資料です。

この時に献上した宝物ですが、法隆寺も江戸時代に2回江戸に出て、出開帳を開いています。1回目は確か元禄年間で、出開帳は普通は一般の人に見せるということだけでも、法隆寺の宝物を持って来て、江戸の大名屋敷をまわるんですね。まわって見せてなにがしかせしめる、というようなことをして経済的に潤ったということでした。それに味をしめて、その後、天保年間にもう一回、法隆寺が江戸に持ってくるんですけど、今度は、大名家の経済もすごく衰えていますから、余りはかばかしい成果は上げられない。そのまま帰っていった。

その時の、江戸時代の後半の出開帳の時の資料をバラバラにしないで置いて、どうもそれを一括して皇室に献上したということのようです。

そういった、文化財的なものの危機的な状況にあって、それと共に、新しい時代だ、ということで、いろいろなものを集めた博覧会を開こうという計画ができます。ここに「大学南校博物館名の博覧会計画」とあります。この大学は今の大学ではなくて、役所の名前です。今でいうと文部科学省なのかな。文部科学省って名前もいやですね、文部省って言えば簡単なのですけれども。今でいうと、文部科学省。とにかく、博覧会を開こう、これは新しい時代になったんだから、新しい時代を象徴するようなものをいろいろ集めて来て見せる、というような趣旨が書かれていました。しかし、この時は布告だけに終わって、実際に開かれなかったんですが、改めて開かれることになります。また、こういう風潮の

中で、文化財が非常に危機的な状況にあるという中で、この大学、今でいう文部科学省はですね、太政官^{だいじょうかん}に提案をするわけです。一つは集古館^{しゅうこかん}を作ろう、と。古いものを集める館ですから、今でいう博物館ですね。これを作って集めたものをそこに置こうということと、それからもう一つ、それ以前に古いものを保護するという、普通にそういう政策取らなければだめだ、という提案をする訳です。提言をする。これを受けて、太政官では、集古館^{しゅうこかん}はちょっと置いて、取りあえず「古器旧物^{こききゅうぶつ}保全の布告」というのを出します。これはもう、それぞれの地域でもって、残されている古器旧物を調べてですね、太政官に報告しろ、という布告を出します。これで、各地方各官庁での調査がなされまして、その結果が博物館につながります。そうしてまた、神社仏閣などにそういったものが数多く報告されて改めて「古社寺^{こしゃじ}保存法」という法律が作られることになっていきます。この「古社寺保存法」は、現在の文化財保護法につながる法律の一番初めの段階のものです。

博物館に話を戻しますが、博覧会の最初の計画は布告だけに終わったんですが、実際に明治5年、1872年3月10日から「湯島聖堂大成殿^{たいせいでん}」というところを会場にしまして、この博覧会が開かれることとなります。湯島の聖堂大成殿、この写真がそうですけども、これによって、最初の博覧会が開かれます。この湯島の聖堂は現在でも存在しております、大成殿の建物もあります。今の建物は新しい建物ですけども、東京の御茶ノ水駅のちょっと北側のところに残っております。

これ湯島の聖堂ですから、江戸時代から学問の聖地だった訳ですが、もともと湯島の聖堂の土地だったところに、「東京医科歯科大学」が建てられていますし、それ以前は、女子高等師範学校、それから東京高等師範学校などの学校が建てられていた空間です。この大成殿の建物を使って博覧会が開かれる訳ですが、この時はちょうど、1973年にオーストラリアのウィーンで開催されることになっていたウィーンの万国博覧会で出品する資料の紹介も兼ねて、この博覧会が開かれました。

広く全国に呼び掛けて収集していきます。この博覧会の出品目録がありますが、もちろん皇室からの御物も出て来ていますし、いわゆる古器旧物^{こききゅうぶつ}、今でいう文化財、それから剥製・標本といったもの、この頃、天産物という言葉がよくつかわれます。要するに自然の資料ということですね。そういった資料など600点余りがありまして、非常に広範な資料の展示だったことが、うかがわれます。

非常に人気を呼びまして、当初3月10日から20日間、3月いっぱい開催する予定だったのですが、1か月会期を延長するということにもなりました。

非常に人気を呼んだ様子って言うのが、こんな錦絵に残されたりしていまして、これを見ますと、大成殿の中、前の庭ですね。ここに名古屋城の天守閣から降ろした金のシャチホコがある。デンと座っています。これが展示されて非常に人気を呼んだようです。

この左側の錦絵には、展示物と金のシャチホコの様子なのですが、この頃描かれた錦絵

の中には、人の頭しか描いていないという絵もあつたりします。非常に賑わっている。入場者総数が約 50 日で 15 万人。一日平均 3 千人ですね。非常に人気があつた。

比較にはならないのですけれども、当館で前回は行われました特別展の、「医は仁術」展というのは、一日平均にすると、大体 570 人くらいでした。一番多い日で、1650 人ですから、残念ながら地域も違うし、時代も違うんですが、これには及ばなかつた。及ばなかつたといつても、「医は仁術」展は、非常にたくさんのお客様のおかげさまで見て頂きまして、この博物館で設定した目標人数とほとんど同じくらいのお客様になりました。大変にありがとうございました。

ちなみに現在の「徳川展」なのですが、ちょっとまだ、出足が悪いようでございますので、どうぞ皆さん、もうご覧になつた方もいらっしゃると思いますが、どうぞご覧になつて、それからできればお近くの人をお誘いして、また来て頂きたい、と思つています。今のところ、「徳川展」の一日平均 250 人ですが、これから上がっていく数字なのですけれども。

そんな様子で非常に賑わつていました。ちなみに、この、金のシャチホコですが、これはオーストリアのウィーン万国博覧会に行つています。行つて展示されて、人気を博したようですが、当時ですから、もちろん飛行機でなくて、船で運びます。

この時はこういう嚴重な囲いの中に置かれていたようです。左側の錦絵ではむき出しですが、右側の写真に残されている様子ではしっかりした囲いがあります。

この博覧会について、ウィーンの方博に参加する為の組織として、博覧会事務局というものが作られまして、今でいうとオリンピックの組織委員会のようなものになるのでしょうか、それに近いものでしょうか。

ウィーン方博参加の為の組織である博覧会事務局で実際に活動していた人達というのが、当時、文部省、先程の大学から組織名変わつて文部省となつていた、その文部省の中で、博覧会を担当していた人達、博物局という部局で担当していたのですが、そこにいた町田久成・田中芳男という人。

町田久成という人は、薩摩藩の上士の出身です。田中芳男という人は長野県の飯田出身の、先ほど触れた博物学者の中でね。町田久成も、これは薩摩藩が幕末に少年達を大量に密航させてヨーロッパに送り込んだんですけれども、その時の監督責任者として行つた人です。ですから、ヨーロッパをよく見て来ている。田中芳男も、これも以前にもお話ししたところなんですけれども、やっぱり、幕末の江戸幕府の使節団に加わつて、ヨーロッパをよく見ている。特に博物館なんかをよく見て来ている人達です。こういった人達が、自分達がヨーロッパで見聞して来たさまざまのものを参考にしながら、日本の博物館の草創期に、関わつて来る訳です。町田や田中がもともと勤務していたのは文部省でしたが、博覧会事

務局でウィーン万博の為の事務局の仕事も兼ねていました。

博覧会事務局というのは、太政官という役所の中で作られていました。太政官と文部省とどっちの力が強いのか、といったら、当然、太政官ですね。湯島にあった博物館、「文部省博物館」の博物館の担当の人達というのも、博覧会事務局に移ってしまう。合併してしまいます。

その博覧会事務局が置かれていたのが、^{うちやましたちやう}内山下町という現代の東京の有楽町の駅のすぐ東側、今、「帝国ホテル」「日比谷公園」などがある、あの一帯なのですけれども、あの辺りに山下門という門があって、その門の内側に博物館施設が作られました。この、博覧会事務局通称「山下門内博物館」には、古物館・動物陳列所・植物鉱物陳列所・農業館・舶来品陳列所・植物分科園・有用植物園、などの施設がありまして、いろいろなもの、自然・人文、それから殖産興業的な部分というのを含めた総合博物館だった訳です。

ところが、博覧会事務局というのは、ウィーン万博参加の為の組織ですから、ウィーン万博が終わってしまえば、仕事は無くなる。お役御免になる訳ですよ。

そこで、それが終わった後、また文部省に戻ることになりまして、湯島の大成殿にまた行くことになります。博覧会事務局そのものは、発展的に解消しまして、今度は、内務省の所管となった「博物館」というものにかわります。

「博物館」、かぎカッコ（「」）で、「博物館」と示したのは、博物館という固有名詞なんですね。一方、湯島に戻って行ったほうの、復帰したほうは、これは「東京博物館」となっています。この2つが現在の東京の上野の国立博物館の流れにつながっていきます。つまり、内務省に残ったのが東京国立博物館、湯島大成殿に戻って行ったほうが「国立科学博物館」です。

この頃、地方でも、勸業政策推進のために博覧会が開かれ、それが博物館になっていきます。この写真は「函館博物館」。この「函館博物館」は、「北海道開拓使」という北海道の開発の為の役所が作られるんですけども、その開拓使が設けた博物館で、この写真の建物は1878年の建物で、日本で一番古い博物館の建物です。博物館として作られた建物で、現在も残っているそれからまた、神社・仏閣の宝物殿も残されています。

地方の博物館で「札幌博物館」というのを紹介しますが、これは、現在は「北海道大学」の植物園の中にある博物館。正式な名前が「北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園博物館」。この建物は、1882年に作られた現在の植物園の中に残っている建物で、もともとはこれもやはり北海道開拓使が作った博物館でした。開拓使が1877（明治10）年に札幌偕楽園内に設立した開拓使札幌仮博物館（現在の札幌市北区北7条西7丁目、清華亭付近）に始まり、これが北海道の博物館の歴史の始まりでもあります。その後、仮博物館の陳列場が狭くなったこともあり1882（明治15）年に札幌牧羊場内に建てられた札幌博

物場が現在の博物館の建物です。1884（明治17）年に農商務省北海道事業管理局から札幌農学校（現在の北海道大学）に移管され、今日に至っています。当時は自然史、民族、考古学のほか物産品や産業資料を含む総合博物館として一般公開していました。

北海道開拓使の建物ということで、クローズアップした屋根のところに星のマークが付いています。それからこの屋根の下に星のマーク、これが北海道開拓使のマークなのですね。これ、どこか覚えありませんか？多分、夕方になると喉を潤したくなる何かですね。「サッポロビール」、あれが開拓使の始めた事業が現在までつながっているので「サッポロビール」がこのマークを使っているんですね。私は「アサヒ」より「サッポロ」のほうが、どっちかというより好きなのですが。

この博物館の中の展示室はこんなふう、現代はこんなふうです。ここに樺太犬のタローの剥製があります。タローはこんなところにいまして、ジローのほうは「国立科学博物館」にあります。

私は、タローとジローが生きていた、という、このニュースをそんなにハッキリではない、おぼろげですけども、覚えています。最近が高倉健さんが主演した、「南極物語」で非常に有名になったものでありますけれども、タローとジローは生きていた、という非常に衝撃的なニュースだったということを知っています。北海道と東京、じゃない、つくばにいるんですが、一緒にしてやればいいなあ、と思ったりしますが。

先程ちょっと触れました内務省の「博物館」ですが、明治8年に「皇国ノ主館トシテ…該館（この館）ニ限り単ニ博物館ト相称シ…」という「博物館」というものになります。内務省の所管ですけども、この頃までは、まだどちらかというとな殖産興業というかな、その面の働きというのが強かった。しかし、実際の展示施設、展示館を見ますと、古物館・天産部、さっき言った自然環境の資料ですね。天産部列品館とか、農業山林部列品館とか、工業機械列品館・芸術部陳列館なんかがありました。まあ、現代風に言うと、総合博物館の体を成していた訳です。

先程も申し上げましたように、この博物館のあるところというのが、現在の「帝国ホテル」のあたり、その後このところに、「鹿鳴館」というのが作られるんですが、ここはもともと江戸幕府になってから日比谷の入り江を埋めて作られた土地なものですから、湿気が多いという環境で博物館としてずっといくのには、資料の保存上はあまりよろしくないんじゃないか、ということで、これはまあ、鹿鳴館ができるということもあったと思うんですけども、上野公園に移転する計画というのが立てられます。

現在のの上野公園は、昔は「寛永寺」の旧本坊跡です。「寛永寺」の境内、戊辰戦争の時に彰義隊が立てこもって焼けちゃった訳ですが、焼け落ちてしまった「寛永寺」の本坊の跡地を利用して博物館を作ろうということになりました。この時、さっきふれた、湯島のほうにあった文部省の博物館のほうも上野に行こうとするんですが、「寛永寺」の旧本坊跡と、

取り合いをするんですね。

文部省と内務省とどちらが力が強いでしょう。当然、内務省なんでね。こちらが勝ちまして、しかし、この文部省の博物館も上野に移転します。移転するんですが、旧本坊の跡ではなくて、現在の「東京芸術大学」がある場所に移転を一旦します。

こっちの内務省のほうですけれども、「寛永寺」旧本坊跡に移りまして、ここにこういう建物が作られます。^{ジョサイア} Josiah ^{コンダー} Conder というお雇い外国人の設計です。^{コンダー} Conder という呼び方が正しい言い方なのでしょうけれども、普通、コンドルって言っています。コンドルという言い方に従いますが、コンドルが設計した新館、コンドルさんはちゃんと設計した建物を作ります。決してアンビルドではないんですね。こういう新館を作って移転しまして、この後、毎日開館するということになっていきました。これまでは内務省の内山下町の博物館の時代には1と6の日と、日曜日、という開館の仕方をしていたので、1日6日11日16日というようにですね。この上野に移転してからは、連日開館するということになっていきました。

この博物館が内務省の所管でしたが、内務省から分かれて農商務省という役所が作られ、これは日本がついこの間いだまでの役所でいえば、通産省みたいなんでしょうかね、通商産業省。この農商務省の所管のあたりまでは、まだまだ、殖産興業的なおもむきが強かったんですが、だんだん今でいう文化財保護につながる働きが強くなる中で、宮内庁の所管に移っていきます。

名称も1889年には、「帝国博物館」と名前を変えていきます。一方この、古文化財が多く、所在する京都や奈良というところにも、もともと、そういった古文化財の調査を博物館の職員たちがやっていたということもあって、奈良や京都にも博物館を作ろうということが決められて来まして、それぞれ、「奈良帝国博物館」「京都帝国博物館」。(レジュメの写真) 上が奈良、下が京都ですが、それぞれで開館していきます。

こうやって、3つの帝国博物館になる訳ですが、さらにこれが1900年、「帝室博物館」というふうに名称を変えます。帝室ですからまさに皇室の持ち物だという性格がはっきりさせるのでね、こうなったことでもう、今まで持っていた殖産興業との関係というのはほとんど無くなっていきまして、古文化財の保存それから研究調査というふうに特化されていく訳です。

この、東京上野の博物館には明治42年に当時の皇太子殿下のご成婚記念事業ということで、現在も残っております「^{ひょうけいかん}表慶館」という建物が建設献納されますし、また大正13年、これも当時の皇太子殿下、昭和天皇ですね、そのご成婚記念ということで、京都の帝室博物館を京都市に^{かたし}下賜して、「^{おんし}恩賜京都博物館」ということになりました。

この「恩賜京都博物館」は第二次世界大戦後、また国立に戻って、東京・京都・奈良、3つの国立博物館という体制が作られてきています。

余り時間がなくなって来てしまったんですが、震災との関係で、関東大震災の時にコンドルの設計した本館が壊れます。これは、正面の玄関の部分が壊れたというだけの写真なのですが、実は展示室の中も非常に被災してしまっていて、これ写真を入れるのを忘れました。もう展示ケースが倒れてすごい状況になっている写真が残されています。これによってコンドルの設計したこの建物は使えなくなりまして、しばらく先程の横の「表慶館」、これを主展示室として活用していくことになります。

つぎに動物園・水族館を見ていきます。

先程の文部省が開いた博覧会を湯島聖堂で開いた時に、このオオサンショウウオが展示されていました。生きたままです。記録があります。

それから「山下門内博物館」には動物陳列所があって、これはあまり珍しい動物じゃないんですけども、80種ほど展示されていた。それから、上野に移転した時に、この動物陳列所がそのまま付属の動物園として上野と一緒に移りました。

動物園はこの間、この内務省系の博物館の一部として発展していきまして、1924年（大正13年）に皇太子ご成婚記念ということで東京市に下賜されまして、現在の「東京都恩賜上野動物園」になっていきます。「上野動物園」って普通にいいですけど、正式にはこんな名称です。

ちなみに世界ではどうなのか、これはたまたま家の近くの古本屋さんでH.デンベックという方の著した『動物園の誕生』という本を見つけてまして、それを見ますと、今から4000年前に、メソポタミアの一角にも動物園みたいなのがあったと。これは宗教上の動機だったり、あるいは民衆に珍しいものを見せて娯楽に供しようと、そんな目的があって動物を飼ったという記録がありましたし、だいぶ後になりましたが、16世紀、インドのムガル帝国には動物園がありました。ムガル帝国のアクバル大帝という皇帝が死んだときには、象を5000頭、それからラクダ、ひとこぶラクダ・ふたこぶラクダ合わせて1000頭以上、飼育されていた、という記録があります。これは、動物たちを虐待しないように動物たちが病んだ時には最高の医療を施せ、というような命令が出ていたということでした。

ヨーロッパでは、フランスのルイ14世の頃に王室の庭園にメナジュリーがあって、メナジュリーは動物園のことです。そこに、ヒョウやライオンやクマ、ワニや、カメとか飼われていた、という記録があります。

オーストリアのウィーン、ここには、ハプスブルク家の動物公園がありました。これが1752で、当時のハプスブルク家のオーストリア帝国の女帝マリア・テレジアがウィーン郊外にあるシェーンブルン宮殿の横にメナジュリーが作られまして、これが現代まで続いています。

ただ、動物園というと、今、メナジュリーが動物園ですって断らなくちゃいけなかった

んですが、動物園は普通、ZOOズーっていいですよ、その、ZOO の名前の謂れは「ロンドン動物園 (LONDON' ZOO)」ですね。ここは「Zoological Society of London」ズーロジカル ソサエティ オブ ロンドンで、1826年に作られました、そのまま訳すと「ロンドン動物学協会」でしょうか。その庭園に動物が飼育されていて、それが公開されたところから、本当は動物園 Zoological Parkズーロジカル パークって言ったりしますが、この ZOO という名称が動物園の代名詞になっていきます。ここにはゾウ・チンパンジー・キリン・カバや、水族館も作られていましたし、多くの人が訪れていた、という記録があります。

ちょっと時間オーバーしてしまいますが、最後に水族館の始まりを見ます。今ふれた、ロンドン動物園の中に「Fish House」フィッシュ ハウスというのが設けられまして、それが見本のようになって、各地に水族館が作られていきます。アメリカでは 1876 年にニューヨークにできた淡水の水族館ですが、ロンドンの Fish House の写真が残されています。こんな様子だった、と。水槽があって、壁際にも水槽が置かれて、その中に水生動物が飼育されていた、と。甲殻類・ヒトデ・ウニ・イソギンチャク・ホヤ、魚類、それから有殻・無殻の軟体動物などが、自然のまま、生きた状態で活動していたといいます。この時の記録によると、生き生きと活動し、時に休息し、時に食べたり食べられたりしている、というようなことが書かれていました。

日本の水族館は「上野動物園」の中に、この時「上野動物園」の名前はまだ無いんですが、その中に作られていまして、ここに「うをのぞき」と書かれています。これがどうもそうらしいですね。これを見ますと、タカ・トビ・ワシ・カンガルー・サル、こういう飼育舎があって、虎・象もいて、その中に「うをのぞき」の建物が入っている。これがどうも最初のもので、図が残されていまして、ここから入って行って、この、「うをのぞき」。これは水槽で中に水族が飼育されていたという状況がみられました。この実態はどんな形のものかよく解っていなかったのですが、東京の「葛西臨海水族園」の園長さんをやっていた西源二郎先生という方が、調べて下さりまして、その結果、この実態が見えてきました。

今日もまた、時間オーバーしてしまいましたが、今日の話は、これで終わりとさせていただきます。

どうもありがとうございました。

(拍手)

司会：皆さん、ご清聴ありがとうございました。

今回は第 3 回、ということで、次回第 4 回はですね、8 月 29 日土曜日、また同じ時間にこの講堂で行いますので、是非ご参加下さい。